

小林 知, 『カンボジア村落世界の再生』(京都大学東南アジア研究所 地域研究叢書23)

京都大学学術出版会, 2011, 528p.

この本を手にとる人は、まずはすばらしい写真の数々に目を奪われるに違いない。2000年から2002年にわたって実施された訪問滞在調査および16カ月間の住み込み調査によって築いた人間関係があってこそ撮影できた写真の数々(特に、家庭内儀礼の写真)である。

本書は著者が京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科に提出した学位申請論文をもとに大幅な加筆修正を施した労作である。ポル・ポト時代、そしてその後の社会主義政権を経験した現代カンボジアの農村部に生きる人びとの営みを多方面から丹念に描いた、きわめて完成度の高い民族誌と言えよう。「文化人類学を基礎とした地域研究をおこなっている者」としての著者は2004年前後からカンボジア関係の論文を発表しているが、現時点の集大成が本書であると理解される。カンボジアでの現地調査は20年近く不可能であったために研究の途絶があったが、1990年代以降かなりの蓄積をみせてきた。ポル・ポト時代を生き抜き、難民キャンプを経て第三国へ移住した人々の手記類もかなり刊行されているが、そのほとんどが元都市住民であった。しかし、国内にとどまった大多数の人々が住むカンボジア農村部の人びとの営みをホリスティックな視点から調査を行い、包括的に且つ詳細に読み解いた作品としての民族誌は長らく待たれたものであった。「あとがき」でも触れられているが、著者が常に念頭においたという、東北タイの「ドンデー村プロジェクト」を、カンボジアにおいて著者は単独でやり遂げた、とも言える。

「再生」という語が書名に含まれていることから明らかのように、ポル・ポト時代という時代の前後における人々の営みの断絶と連続を焦点としながら、トンレサップ湖東岸地域である、コンポントム州コンボンスヴァーイ郡サンコー区VL村を中心調査村とし、近隣村や近隣区を含む地域の集落形成、土地制度、家族、民族、宗教と幅広いテーマについて、丹念な聞き取りや観察により緻密に

データを集め、深い考察を加えている。

本書の目次は以下のとおり。

口絵／凡例

第1章 カンボジア農村社会研究の視点と方法

第2章 カンボジア社会と調査地域の概況

第1部 再生の歴史過程を読み解く

第3章 集落の形成、解体、再編

第4章 農地所有の編制過程

第2部 地域生活の基盤を探る

第5章 生業活動と家計の実態

第6章 経済格差の再現

第3部 生活世界の動態に迫る

第7章 宗教実践の変化と民族的言辭

第8章 仏教実践の多様性と変容

第9章 寺院建造物の再建

第10章 結論

あとがき／参考文献／索引

著者の本書の構成意図は第1章に明解に述べられている。第1章で研究目的と本書を貫く視座が提示され、第2章では対象社会の見取り図を与える背景知識をまとめている。次いで、第1部の2つの章では対象とする地域社会の集落形成と農地についてポル・ポト時代以後とそれ以前の歴史過程に焦点を当てるのに対し、第2部では主として生計活動を取り上げた同地域の共時的な分析となっている。第3部ではこれらをふまえ、3つの章で人々の相互行為の動態と生活の「変化」の実態を宗教活動の再編という領域から分析し、最終章が結論である。

本書が開いた新たな地平とは、著者が第1章で明確に述べているように、カンボジアに関してこれまで書かれた古典的な「コミュニティスタディ」の限界を超えるべく試み、それに成功したということであろう。その第一は、ポル・ポト時代以後のみならず、それ以前をも視野に含めたということである。この試みは、土地台帳その他ほとんどの行政文書が内戦で失われたカンボジアにおいては、言うは易しく行うのは至難の業であるが、著者は信じられないほどの粘り強さで歴史の再構成を試みた。もちろんこの時間的な範囲は章によって大きく伸縮する。例えば、農地に関しては資料

の制約によりボル・ポト時代以前については概容にとどまるが、それ以降の農地所有の実態については非常に精緻に分析がなされている。集落形成に関しては「草分け」夫婦に関する聞き書きにより1930年代にまで遡っている。仏教寺院での実践の多様性については1960年代まで辿った他、ボル・ポト時代以前にすでに変容が生じていた事項についても目配りがなされている。

第二は、調査村を閉じた空間として描くのではなく、より広い地域との関係性の中で描くという方法である。このより広い地域という場合も、章によっては考察範囲が近隣村であったり、調査村の北部内陸地域を指すロック・ルーであったり、州都コンポントムや首都プノンペンが含まれたりと伸縮する。これらについて、著者は「人びとの日常生活の活動の広がりを素直に追求した結果」だとさりりと書いているが(p.31)、払われた努力は並大抵のものではない。中心調査村VL村の全世帯悉皆調査は最低限必要としても(とはいえ著者の調査項目は極めて多岐にわたる)、例えば仏教寺院調査においては、コンボンスヴァーイおよびストゥンサエンの2郡という広域において(ほぼ)全寺院を訪問してデータ収集を行っている他、寺院間の実践の違いを調べるために、同一時期の2寺院の儀礼観察と詳細な情報収集をも怠っていない。生業調査においても、VL村とは別にPA村においても詳細なデータを収集し比較考察しているといった具合である。

本書が明らかにしたことは数多いが、本書がめざしたことでもあり、最も重要な点として挙げられるのは、カンボジア農村がボル・ポト時代以前と以後との連続性の下に再生した、という指摘であろう。本書では「ボル・ポト時代に何もかも無に帰したカンボジア」「悲劇の現代史」というステレオ・タイプでカンボジアを語ることへの強い違和感が繰り返し表明されており、ボル・ポト時代以前から継続している社会関係や伝統・慣習、それに関する記憶が地域社会の「再生」の土台となった事実を土地制度、家族制度、そして宗教実践と、多角的にそして実証的に明らかにした。ボル・ポト時代は確かに極めて急進的であり、伝統的な社会的紐帯を断ち切ることに徹底していた。

しかし3年余という、家族周期を超えない短期間で破綻したために、人びとの過去の記憶を消去することはなく、そうした過去の記憶に基づいて農村は再生をしてきた。著者は、ボル・ポト時代がらりと変わってしまった水田区画や農地の所有関係、宗教が否定されたボル・ポト時代およびその後の社会主義政権下を実施された出家年齢制限による出家経験の世代間ギャップといった「断絶」は確かに存在するものの、1979年以後のカンボジア地域社会において「再生はゼロからはじまったのではない」「再生の基盤は失われなかった」と結論付けている(第10章)。

カンボジア地域研究に対する第二の大きな貢献は、地域における人びとが持つ空間認識を形作る、社会の構成概念を抽出したことであろう。特に、チェン(=中国の、中国人)/クマエ(=クメールの、クメール人)という民族言辭および、宗教実践におけるサマイ(=新しい)/ボラーン(=古い)の対立軸の分析は本書で最も秀逸な部分であろう。著者は、カンボジアにおける「チェン」という説明や名乗りや名指しは、単に宗教実践面での違いに与えられる語ではなく、その地域の社会経済的な状況や諸関係を表現するものとしてこそその本質に接近できるとし、「チェン」が流動的な社会範疇であることを、発話の具体的な場面を記述することによって活写している。

サマイ/ボラーンをキーワードに分析する仏教寺院と人々の実践に関しては、ボル・ポト時代以前からの仏教実践の多様性・多重性に関する興味をかきたてる。寺院を舞台とした実践をめぐるポリティクスは、農村の仏教徒がけっして一枚岩でないこととともに、カンボジア人にとって仏教寺院の建設や運営・維持がいかに重要な関心事であるかを語る。また、国レベルの仏教界の動きと一地方である調査地域とが個人の動きに伴いダイナミックに繋がっていることが鮮やかに描かれている。

本書はあくまでカンボジアの一地域を対象とした研究でありながら、その現代史と文化の厚い記述を通して、カンボジアと言う国全体、カンボジア人と自称する人々の生活空間・社会・人生へのまなざしを多く学ぶことができる。それは著者が、

一集落を超えた広い視野に立った調査を行ったからでもあり、また、人々の目線で、人々の言葉によく耳を傾けながら可能な限り共感的理解に努めた調査活動に基づく記述であるからに他ならない。その結果、地域というまとまりを常に念頭に置きつつも、個々人の相互に異なる人生、あるいはその個人ならではの努力や創造性といった面をも大切に描くことができた（特に第6章と第8章）。

以下、若干の不満点を述べたい。1960年以前の先行研究や非実証的カンボジア文化論の批判的検討は第1章にまとまっている他、第2章以下では近年行われた個々の研究に文中で言及しないかわりに各章の冒頭で主な論点について述べる、としており、民族誌的記述にページを割く必要がある以上、この書き方で正解であろう。ただし、全ての章の冒頭で先行研究に言及しているわけではない。また、第3章のボル・ポト時代に関する記述部分で、人びとの集団としての移動や日常の労働単位についてはかなり解明されているのに対し、居住単位としての世帯がどのように解体されたのか、あるいは全く解体されなかったのかがやや不明瞭であるように感じた。これについては、解体されたとする先行諸文献と引き合わせての分析があってもよかったのではないかと思う。

次に表記の面についてである。本書では初出のキーワードにカンボジア（クメール）語表記が併記されている。カンボジア語の音を表す適切なカタカナの選択にあたっては常にジレンマが伴うが、カンボジア文字表記を添えることでこの悩みを一部解消でき、またカンボジア研究者には大きな助けとなる。また、儀礼で聞かれる実際の発話内容や何気なく言葉にされた生活実感などに原語を併記することにより、それらの細部に真実が宿ることが読み取れると同時に、著者のカンボジア語力が極めて高く、データに信頼がもてることが伝わる。ただし、カンボジア国内においても若干の揺らぎがある正書法（綴り）とは別に、本書の表記には誤記と思われるものがわずかながら含まれる（例を挙げれば、p.321の儀礼で唱える言葉の一部、p.378「授戒師」、p.411「貝葉文書」「(宗教の)実践」、p.418「保守主義」、p.424「混ざり合った」、p.510とp.512～513「プノンペン」）。今後のカン

ボジア研究の必読文献として長く読まれるに違いない本書だけにこの点は少々残念である。増刷の折にはぜひ訂正されることを願う。

また、調査時から10年ほどを経て刊行された本書では、現在までに変化した事象も多いということで、調査時の事実を過去形で記述することに納得しないわけではないのだが、調査時「現在」として現在形で書いても良かったのではないかと思う。というのも、本書が扱うタイムスパンとして調査時以前の過去も含まれるため、その部分は当然過去形で記述せざるを得ない。ならば調査時を現在形にした方が誤解を生みにくい。「……していた。」という記述が、調査時“以前”にそうであったかのような読み違えをしそうになることがしばしばあった。

最後に、本書は専門書ではあるが、ぜひ大学学部生にも広く読まれてほしい。大部ではあっても記述が平易な本書は学部生にも十分に読みこなせるだろう。カンボジアへの関心が高く、国際協力を含め将来何らかの関わりを持ちたいと考えてはいても、カンボジアのイメージはと問われれば「アンコール・ワット」以外に、「内戦」「地雷」「貧困」という語彙しか持たない——もちろんこれらは現在もカンボジア社会の理解のために重要なキーワードであり続けていることは確かだが——彼（女）らにぜひ読んでもらいたい、そして広がりや奥行きのある宇宙としてのカンボジアをあらためて探求してほしいというのが、一大学教員としての筆者が一読後にもった最初の感想であった。

（高橋美和・愛国学園大学）

山口裕子、『歴史語りの人類学——複数の過去を生きるインドネシア東部の小地域社会』世界思想社、2011、396p.

本書は、人類学者である著者が、スラウェシ東南に位置するブトン島のウォリオ（人口約1,700人）とワブラ（約2,200人）という二つの小地域社会を対象に、人々が互いに齟齬をはらむそれぞれの歴史をいかに語り、その語りが生の中でのかに生きているか、そしてその齟齬が何を示して